あつた、此の時以來は所在に榮えた町も俄かに衰微し、或は居民の全體を失つた所も少くなかつた。サマルカンドの如きも其の住民は十分の一程になつたとも記され、或は殆んど全く滅絶したとも記されて居る。さて此の後漸々と復興はしたが、新たに現はれて來たものには、もはや全くイラン風の色彩は失はれて、純回教的卽ちセミチックの文明が蔽ひかゝつて居たのである。帖木兒の出たのは卽ちかゝる時であつて、劍をかざして異教徒を征するといふことが極樂に行くべき方法であると一般に說き敎へられ、また信ぜられて居つた時であつた。

此の頃政治上から見た一般の形勢をのべると、成吉思汗の後なる察合臺汗國の運命旣に衰へて、彼の生れる三年前卽ち千三百三十年に位に卽いたカザン汗といふのが、眞實の王としては殆んどその最後ともいふべき人で、この王が暴虐の爲に臣下の爲に殺されてからは、蒙古系統のものが撰立されこそしたが、それは只だ一箇の傀儡で、何等の權威もなかつたやうである。從がつて政權はたゞ其の下の貴族の手に歸して、然も互に軋轢し、殆んど無政府の有樣に陷つてしまつた。此の際漸次頭角を顯はして來たのが卽ちケシュを根據地としたベルラス家卽ち帖木兒の一族で、彼の叔父（或は兄とも記さる）ハジ・ベルラスなるものが之を統御して、種々の機會に乘じて漸やく權勢を張つて、附近の諸地を從がへることになつた。一體察合臺汗國といふのは、初めから露領土耳其斯坦ばかりでなく、葱嶺を東に越えた淸領土耳其斯坦及び此の兩地の北方一帶卽ち今日の伊犁からその西方に亘つて迄も、悉く領有して居たのであるが、後に之が東と西とに別れて、東はカシュガルを都とせる淸領土耳其斯坦、西は露領土耳其斯坦と別れることになつた、然るに今西の察合臺汗國がかゝる有樣になつたからして、東部の王トグルク・チムールといふのが、自家一族の此の頽勢を挽回する爲に、千三百六十年に軍を指揮して西に向つて進發した。帖木兒が